

屋久島における宿泊業者および長期滞在者の実態把握 ー長期滞在型観光の拡大による持続可能な観光の実現にむけてー

森林科学専攻 西富琉之助

指導教員 柴崎茂光

背景・目的・方法 鹿児島県屋久島では、高速船の就航や世界遺産登録により、1990年に19万人だった年間入込客数は、ピークの2007年には41万人へと急増し、山岳地域では登山者急増によるオーバーツーリズム（以下、OT）が発生した。その後、入込客数は21万人（2022年）まで漸減し、OTも沈静化した。しかし、現在、屋久島空港拡張計画が進行しており、OT再発の懸念が残る。OTの軽減策として、特定の時期や場所に利用を集中させない「分散」対策があり、その一つとして、長期滞在型観光（以下、滞在型観光）があるが、屋久島での研究蓄積は十分とはいえない。そこで本研究では、宿泊業者と観光客の実態を把握した上で、滞在型観光の拡大や持続可能な観光への移行の可能性を考察した。分析に際して、屋久島観光協会などの統計・業務資料を用いて、観光の盛衰状況を把握した。また宿泊業者へのアンケート調査（全176軒中134軒回収）などから、経営状況や長期滞在者（5泊以上と定義）の受入態勢を把握した。さらに、ゲストハウス（以下、GH）や1棟貸しの長期滞在者への聞き取り調査（19名）も実施し、来訪動機や行動特性に基づく類型化を行った。

観光の盛衰状況 島内の宿泊施設数は1990年代より増加し、2012年をピークに、その後は減少傾向が続いた。観光客の特徴（2015年）だが、関東地方からの来訪者が32%と最も多く、島内宿泊数は2～3泊が74%を占めた。長期滞在者は4%に過ぎず、リピーターも23%にとどまっていた。また、57%の観光客が縄文杉を訪問するなど、山岳地域への利用集中がみられた。さらに、2015年には8,187人だった外国人旅行者（以下、海外客）の年間延べ宿泊者は、2019年には14,303人まで増加した。なお、既存の統計資料では、長期滞在や1棟貸しに関する詳細な情報が把握できないため、全宿泊業者へのアンケート調査を実施した。

宿泊業者の調査結果 ホテル・民宿・1棟貸し・GH・キャンプ場他の5つの宿泊業態に分類し、分析を行った。業態別にみると、民宿が76軒と最も多く、1棟貸し（39軒）、ホテル（9軒）、GH（6軒）、キャンプ場他（4軒）と続いた。ホテルや民宿は、島内で人口の多い宮之浦・安房地区に集中していたが、1棟貸しやGHは南部地区に多かった。開業年については、1990年代にホテルや民宿、2000年代には民宿、2010年代からは1棟貸しやGHが開業する傾向が見られた。2023年の平均のべ宿泊客数をみると、ホテルが15,494人/軒と最も多く、民宿（2,011人/軒）、GH（1,750人/軒）、1棟貸し（915人/軒）と続いた。1泊あたりの平均宿泊料金は、ホテルが17,139円/人と最も高く、1棟貸し（9,313円/人）、民宿（5,855円/人）、GH（3,283円/人）と続いた。

経営者について、民宿では島内出身者が7割を超えていたが、ホテル・1棟貸し・GHではその割合が4割に満たなかった。また、民宿の経営者は、70代が中心だったが、1棟貸しやGHは50代が多かった。経営課題について、民宿では施設の老朽化を、ホテル・1棟貸し・GHでは人手不足をあげていた。経営意欲に関して、ホテルや民宿では2割近くが経営の縮小を検討している一方で、1棟貸しやGHでは縮小の検討は1割未満と少なかった。

客層について、いずれの宿泊業態も、関東地方からの来訪者が最も多く、島内宿泊数（最頻値）は2泊が最も多く、5泊以上という回答は1割程度と少なかった。訪問グループについては、家族客の多いホテルや1棟貸し、家族客・友人客・1人客が中心の民宿、1人客が

中心の GH など、業態ごとに差がみられた。海外客に関して、1 棟貸しや GH では、4 割近くを海外客が占めていたが、その他の業態ではいずれも 2 割未満だった。過去に宿泊した長期滞在者の属性だが、民宿では 1 人客が、1 棟貸しでは海外客が、GH では海外客と 1 人客が、一部の高級ホテルでは海外客富裕層が多いことが判明した。長期滞在者の今後の受入については、キャンプ場他を除く宿泊業態で 7 割超と積極的で、特に民宿や 1 棟貸しの経営者からは、「受付や清掃などの手間が減る」「顔見知りになると対応が楽だ」などの意見があがった。コンロや調理器具などの自炊設備は、1 棟貸しや GH では 8 割以上の施設で常設していたが、民宿やホテルでは、その割合が 3 割に満たなかった。

長期滞在者の実態 長期滞在者の年齢層は 10～50 代と幅広く、関東地方からの来訪者が 7 割を占め、約半数がリピーターだった。食事は、宿泊施設に付設された設備を使つての自炊が中心だった。滞在中の過ごし方について、縄文杉への訪問計画がある、もしくは訪問したと述べた人は 3 割だった。このほかに、「農業体験中に農家さんと談笑した」など、島民との交流も見られた。さらに、長期滞在者は、3 タイプに類型化できた。第 1 に、屋久島への移住を積極的に考えている「移住組」である。30～50 代が中心で、リピーターが多い傾向がみられた。ただし、「20 代と違ってシェアハウスはきつい」など、個室の宿泊を希望する 30～40 代の女性の意見もあった。第 2 に、ワーケーションなどを行う「ノマド組」である。20～40 代が中心で、他地域での長期滞在経験が豊富であった。第 3 に、出産や転職を契機に、屋久島に訪れた「転機組」である。10～30 代と若く、初めての屋久島訪問で長期滞在しており、「自然の勢いが強く、力強さを感じた」と島の魅力を語る人もいた。

まとめと考察 統計資料などの分析から、入込客数や宿泊施設数は、いずれも 2010 年前後から減少傾向が続いていた。アンケート調査から、現在も 2015 年と同様に、関東地方から、2 泊程度の短期滞在を中心とする観光が主流であることも判明した。また、ホテルや民宿については、2000 年代までに開業したものが大半であり、統計資料とアンケート調査の結果には整合性がみられた。ただし、南部地区については、2010 年代以降も、経営意欲が高い島外出身者によって、1 棟貸しや GH が開業されている実態が、今回の調査を通じて新たに確認できた。また、1 棟貸しや GH では、自炊設備が 8 割以上の施設で常設されているなど、長期滞在向けの設備が充実していた。

長期滞在者については、縄文杉への訪問に必ずしも固執しておらず、宿泊施設で自炊を行いながら、地域の人と交流を行うなど、一般の観光客と異なる行動特性がみられた。一部の「転機組」は、ガイドブックには書かれていない魅力を、滞在期間中に発見していた。

宿泊施設の経営者は、手間が減るなどの理由から、長期滞在の受入に対して前向きだった。安価な投資で済む 1 棟貸しや GH については、経営意欲が高い島外出身者によって、海外客や 1 人客をターゲットとする長期滞在者の誘致が継続・拡大する可能性がある。また、一部の「移住組」は、個室利用を希望しており、民宿がその受入先になる可能性はある。しかし、民宿の経営者は、高齢で経営意欲も低く、現時点では、その可能性は小さいと推察される。

1 棟貸しや GH を利用する長期滞在者が、地域社会にもたらす経済的効果は、のべ宿泊客数や平均宿泊料金から考えると、ホテルと比して大きいとはいえない。しかし様々な島の魅力を感じる長期滞在者は、結果的に利用の分散に貢献し、また地域との交流を通じて、「移住組」のようにリピーターや移住者になるケースも確認できた。滞在型観光の拡大は、中長期的に、屋久島を持続可能な観光地に転換する可能性を秘めている。